

読みとることは、むずかしいことではなかったでしょう。しかし、それをどうあらわしたら、日本語としてわかつてもらえるか、こうなると、今までの文語体の文章ではとても表現できません。

いろいろと苦心の末すえに生まれたのが、この『小公子』の語りかける文体だったのです。母から子へ語りかける『小公子』の文章は、母から子へと伝えられるやさしい愛情の表現でした。

『かあさま、とうさまはもうよくなつて。』

とセドリツクが言いましたら、つかまつたおつかさんの腕がふるえましたから、チヂレ毛の頭をあげて、おつかさんのお顔を見ると、何だか泣きたいような心持がしてきました。それからまた、

——かあさま、おとうさまはもうよくおんなすつたの。

と同じことを言ってみると、どういうわけか、急におつかさんのくびに両手